

中国考古報告集之三

侯 家 莊

(河南安陽侯家莊と殷代墓地)

河南安陽殷墟の発掘は、中国における考古活動のうち、最大の事業であったことは、衆知の通りである。この発掘のために、中国の考古学界は組織が整備され、この発掘によって、中国考古学の技術は、戦前のレベルにまで成長をとげたのであった。

国立中央研究院歴史語言研究所の主宰する殷墟の発掘は、一九二八年から三七七年の日華事変勃発まで、一五回行われた。そのうちでも、一九三四、五年になされた侯家莊の殷の王墓群の発掘は、そのピークと言つてよかつた。

ところが、当時、世界の注目をあびた殷の王墓の内容については、すばらしい出土品や、異常な殉葬の模様が散発的に報告されているだけであつて、その詳細については、長い間未公開のままであつた。

戦争がはじまつて、発掘が中断されてから以後、関係者たちは、出土品や研究資料を戦禍から守るために、言語に絶する苦勞

をした。南京から長沙、桂林、昆明、四川の李荘と疎開し、資料も行を共にした。最終的には、台湾に搬ばれ、そこでようやく荷が解かれ、整理が進んだのであつた。

侯家莊の発掘は、中央研究院の殷墟発掘団のうちから、梁思永を隊長とし、石璋如、劉耀、尹煥章、王湘、高去尋、馬元材、夏鼐らが調査員としてなされた。梁思永は啓蒙思想家として知られる梁啓超の息子で、アメリカに留学して、考古学研究法を学んできた新進の考古学者であつた。戦争が終り、中華人民共和国ができたとき、彼は北京にとどまつて、新生中国の考古研究所の再建のために奔走したが、肺結核のため一九〇〇年に病没した。

その梁思永は疎開中に「河南安陽侯家莊西北岡殷代墓地発掘報告」と「西北岡器物研究紀録」の草稿をつくつていたが、それが他の資料と共に台湾に運ばれていた。これを基にして、関係者のうちから高去尋が中心になつて、これを補修し、正式の報告書として出版することになつたのである。

梁思永の遺稿では、本文は十三章からなり、西北岡墓地の地理・環境や、発掘の経過から、各墓の構造、遺物の解説という、

一つの構成に従つて執筆されていたが、各大墓の内容が大きすぎるので、その構成を改めて、各墓ごとに分けて報告することになったらしい。これまでに一〇〇一号墓(一九六二)、一〇〇二号墓(一九六五年)、一〇〇三号墓(一九六七)、一二二七号(一九六八)墓の四大墓の報告が刊行された。

侯家莊の殷代墓地は東西両区にわかれ、大墓は西区に八基、東区に二基発見され、それにともなつて、千余の小墓が発掘されている。

報告された四基は、いずれも西区のもので、お互いに隣接して営まれているので、墓道の一部が重なつてゐるところもある。

大墓はいずれも中心部が盗掘に遭い、めぼしい副葬品はほとんどなくなつていたが、それでも、墓坑の四隅や墓道内では、攪乱されない部分があつて、墓の構造がわかり、副葬品の一部を採集することができた。

次に各墓の構造をのべてみよう。

一〇〇一号墓は西区の東端中央にある。墓は地下深くに営まれた堅穴の墓坑と、その四方につけられた墓道からなつてゐる。墓坑はプランが亜字形で、東北の長一八・九メートル、東西長二一・三メートル、

深さ一〇・五メートルあり、上口から底部に向って面積が小さくなっている。四墓道のうち、南道が最も大きく、長く、長さ三〇・七メートルもあり、他の三道は短かい。いずれも斜道である。

墓坑内に営まれた木製の墓室は、すでに腐朽してしまっていたが、底に敷いた木板が亜字形の範囲に残っていた。木室の壁面には刻画の文様があり、頂面には儀仗や車、干盾などがおかれていたらしいが、その痕跡しか残っていなかった。

墓中にはいたるところに、犠牲や殉葬の遺骨があった。まず、墓坑の床下には、中心と各隅に九つの腰坑があり、各腰坑には、それぞれ戈を持った兵士一人と犬一匹が埋められていた。木室の頂面と同じ深さの二層台上には、婦女子の殉葬があるが、残存していたのは、北辺と東辺あわせて一一体であった。

墓道の埋土内からも、多くの犠牲骨がでた。無頭の人骨五九体が南道内から数組に分れて出、それとは別に人頭骨七三個が、各墓内からでた。これらは坑内を夯土で埋めるとき、頭と胴とを切りはなして、別々に埋めたもので、年少者の骨が多い。

さらに、墓坑の外にも殉葬墓があった。それは墓坑の東側から発見された人坑二二、馬坑七であって、東墓道を挟んで、その南北両側に整然と並んでいた。

すでに盗掘者によって中心部があらされていたが、それでもまだ、各種の珍らしい副葬品が残っていた。白大理石製の虎や象の彫刻、石・玉・骨・角・貝の諸製品、銅器、白陶、帶袖硬陶などがあげられる。

一〇〇二号墓は一〇〇一号墓の西南隣にある。西北岡大墓群中、最初に発掘された。墓坑の内部は、盗掘によって破壊され、副葬品も一物も残さないほど完全にもち去られている。

この殷大墓の築かれている一帯は、龍山期から殷早期にかけての居住地区であったらしく、その文化層を切って、大墓が築かれている。

墓坑のプランは方形で、南北一九メートル、東西一八メートル、深一・二・五メートルあり、四方の墓道は、南道が最も長く、坂道で、その下端は墓坑の底面にまで達しているのに対し、他の三墓道は、短かくて、階段となっており、各下端は木室の頂面で終っている。

殉葬骨はあまり残存しておらず、墓坑の床下の一つの腰坑があるだけで、夯土内よりは、人頭骨九個が検出された。

副葬品としては、木室の頂面におかれた干盾の儀仗や、獸腿骨、盆、皿などの祭礼用の遺品のほか、盗掘者が遺棄した器物の破片類がかなりあった。

一〇〇三号墓は西区の中央辺北端にある。方形の墓坑は上口での大きさが、南北一八・一メートル、東西一七・九メートルあり、深さは一〇・九メートルである。四本の墓道は一〇〇二号墓の場合と等しく、南道が最も長く、坂道で、坑底に達しており、他の三墓道は階段である。

木室は亜字形のプランで、床に敷いた木板が南北の方向に並んでいた。腰坑は中心に一つだけであった。

副葬品としては、木室の頂面に木框、皮張り虎文の盾が八個検出された。また南墓道の底面から車や鯨の骨がでている。盗掘者によって遺棄された破片類のうちで、注目されるのは、「小臣姞……」の銘のある石製の破片である。

第一二七号墓は西区最西南にある。この墓の北墓道が、北隣りにある一五〇〇号

墓の南道を打破しているので、一二一七号墓の方が晩く作られたことを物語っている。この墓も龍山文化の堆積層を切って営まれている。

墓坑が方形で、それに四墓道のついた型式であるのは他の大墓と同じである。南北径一八・二四メートル、東西径一八・一〇メートル、深一三・五メートル。ただ、各墓道が二部に分れ、墓坑に近い部分が幅広くなっている点、他の大墓とことなる。

最も長い南道は、坂道で、墓坑の底面まで達しているが、他の三道は幅の狭い部分だけが階段になっており、とくに最も短かい西道は、その外端が北に折れている。

この墓も墓坑の中心部は完全に荒らされていたが、残存の夯土内にも、殉葬の埋葬は全くみつけることができなかった。遺存していた唯一の遺構は、西墓道の狭い部分の床に残っていた石磔と太鼓とそれらを架ける懸台などである。木質部はほとんど腐朽し、貝や石を象嵌した飾りの部分がそのまま残っていた。とくに太鼓は木質の桶の両端に鱗皮を張ったもので、太鼓の実物として最初の発見例である。

以上が四大墓の内容であるが、各墓とも

盗掘に遭ったとはいえ、かなりの出土品があった。報告書は、これらの出土品について些細な断片に至るまで、すべてを写真と図面によって載せているのはありがたい。一つの遺跡に関する資料を全部提供するという態度を堅持している。

その反面、遺跡の年代観はいうまでもなし、器物の用法などの考証記述がほとんどない点、読者にとっても足りなさを感ぜしめるが、これはまた冊を改めて考証篇が出されるのかもしれないし、今は提供された資料の龐大さに一驚するばかりである。

(一〇〇一号墓 B 4判変型本文三六〇頁・図版二七七頁・一九六二刊 一〇〇二号墓 B 4判変型本文一二六頁・図版八七 一九六五刊 一〇〇三号墓 B 4判変型本文一二四七頁・図版一一四 一九六七刊 一二二七号墓 B 4判変型本文一二七頁・図版二〇三 一九六八刊)

(樋口隆康)

史

林

(第五二巻第五号)

一九六九年八月二五日印刷
一九六九年九月一日発行
定価三〇〇円

発行人

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内

史

学

研

究

会

理事長

井

上

智

勇

印刷所

京都市下京区七条御所ノ内中町五〇
中村印刷株式会社